
史上最強の兄

暁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

史上最強の兄

【Nコード】

N1515N

【作者名】

暁

【あらすじ】

ある所に一人の転生者がいた。その男の名前は白浜刃。死亡率がかなり高い「史上最強の弟子ケンイチ」に転生してしまった刃は生き残るために梁山泊に弟子入りするがはたして刃はこの世界で無事生き残れるのか？

BATTLE 1 梁山泊！！（前書き）

どうも暁です。

これは2作品目なので1作品目のチート転生！！もよろしく願います。

BATTLE 1 梁山泊！！

BATTLE 1 梁山泊！！

突然だが俺、白浜刃しらばまやいばは転生者である。今のでわかった人もいるがそうである。転生先は史上最強の弟子ケンイチでしかも兼一の兄に転生しまったのである。これに気づいたときはどれだけ転生させた神？を憎んだか・・・なぜならこの漫画めちゃくちゃ死亡率高いからである。ちなみに刃は兼一の一つ年上で最近荒涼高校に入学したばかりである。またまた突然だが先ほど一つ刃は決意した事がある。それは「梁山泊に入ろう！・・・今刃の事を馬鹿だと思ったやつがいるかもしれないが刃にも考えがあつた。それはどうせ一年後には兼一によって巻き込まれてしまうのならそれまでに強くなつてこうというものである。幸い転生するときに神に武術や武器を扱う才能など（ほかにもたくさんあるが）頼んどいたので大丈夫であるう。と言う事で今は肝心の梁山泊を探しているところである。

「なかなか見つからないな・・・」

史上最強の弟子ケンイチは転生前はよく読んでいたが、さすがに梁山泊の場所はわからないので探しているのだがなかなか見つからない。

） しばらく搜索中 ）

「あれじゃね！」

しばらく搜索しているとかなり古くてでかい門をみつけた。看板を見ると「梁山泊」と書いてあった。

「やっとあつた・・・」

意外と探すのに時間がかかったのである。しかしここで一つ刃には不安があつた。それはまず「梁山泊に入門する事ができるのか」というものである。原作では兼一は美羽に紹介してもらったので難なく梁山泊に入門し弟子入りもできたが刃はそういうのではない。武術の達人にいきなり弟子にしてくださいと言っても弟子にしてくれる可能性のほうがいまいだろ。しかし転生するときに神に”転生先の原作にはかわらせる”と言われた事を刃は思い出し早速門の前まで移動した。

どんどん

「だれかいませんか？」

ちなみに門を開けようとしたがビクともしなかつたので素直に誰か中の人にあけてもらおう事にした。

ぎぎぎ~~~~

「うお!?!」

門が開いたので入ろうとしたが門にぶら下がっている人がいたので驚いてしまった。誰がぶら下がっていたのは言わなくてもわかるだろう。そう”剣と兵器の申し子 香坂しぐれ”である。

「なにか・・・よう?」

驚いてた刃だがすぐ持ち直した。

「この道場の主はいますか?」

とりあえず長老に会おうと聞いてみる。

「じじいか? まって・・・ろ」

じじいと聞いてと少し誰の事が考えたがしぐれが長老の事をじじいと呼んでいたことを思い出す。すると奥からでかい老人が歩いてき

た。

「はて？お若いの、梁山泊に何の御用かの？」

「この道場に入門したくて・・・」

長老の迫力によって少しつまってしまふ。

「そうかね。どれ、ついて来なされ」

「は、はい」

一人歩き始めた長老の後を刃は追った。長老の後をついていく途中に何か音が聞こえた。

ズバンズバン

「！！！！」

音がする方向を見ると庭でサンドバックをけているアパチャイがいた。

「ん、ああ。彼はタイ人のアパチャイ・ホパチャイ君27歳」

さすが達人と思うべきかどんどん庭を破壊してっている。するといきなり長老に口を抑えられた。

「あまり驚かんように。喜んで調子に乗るんじゃよ。こらーっ！やめんかアパチャイ！！」

しかしアパチャイは聞いてないのか聞こえてないのか庭を破壊し続ける。

「滅多にこない客なんで少々興奮気味での・・・」

転生してから数年しかたっていないのに死ぬかもな・・・と思った刃だったがこの事は口に出さなかった。

キンキンドサッ

たまたま剣星としぐれの戦闘を目撃してしまったが見なかったことにしようと思った。するといきなり長老が止まった。

「お若いのここで待っておれ今みなをよんで来る」

そう言い残し長老はどこか行った。

） 数分後 ）

ある一部屋に全員が集まった。

「まずみなを紹介しよう」

そう言い一人ずつ紹介してった。

「まずケンカ100段の異名をもつ空手家！逆鬼さかき しお 至緒！！」

「次に裏ムエタイ界の死神！！アパチャイ・ホパチャイ！！」

「次はあらゆる中国拳法の達人！馬ば 剣星けんせい！！」

「次は哲学する柔術家！岬越時こしえつじ 秋雨あきさめ！！」

「次は剣と兵器の申し子香坂しぐれ!!」

「そして長老のわし!!そう、ここはスポーツ化した武術になじめない豪傑や、武術を極めてしまった達人たちが共同生活しとる場所じゃ。一人所要で出てるがの。わしらはここを道場と呼ばず、こう呼んでおる・・・梁山泊と!!!!!!」

梁山泊ってしってるしと思ったけど刃は言わない事にした。

「で、改めて聞こう、白浜刃君!入門するかね?我らが梁山泊に!!」

「強く・・・なれるのなら!!」

ここはあえて兼一が入門するさいに言った言葉を言う刃であった。
このとき長老が微笑んだのは大事な収入源ができたからだとは刃は知る余地もない。

「ではここに住所と名前を書いてね」

「はい」

なぜ筆で書くのか？と一瞬おもったがすぐ書き始めた。

「月謝として二万円いただくね」

「高ッ!!」

これだけの達人に二万円程度で学べるならどんだけ安いのかと思っ
たがさすがに自分の財布が辛いので高いと言う事にした。

「・・・・・・・・・・・・・・・・じゃあ一万円ね」

「・・・・・・・・・・・・・・・・じゃあ五千円でいいね」

「こら剣星、はしたないぞ!!」

秋雨が剣星に言うが長老が止める。

「実はこの梁山泊は今、貧窮を極めて追つての・・・・まあ、美羽が
やりくり上手でなんとかもっているのじゃが・・・・」

さっきの紹介に美羽はいなかったので聞いとく事にした。

「美羽って誰ですか？」

刃がまだ美羽と会っていないことに気づいたのか美羽を呼んだ。

「美羽ちよつと来なさい！」

「はーい。何でしょうかおじい様？」

すると奥から美羽が出てきた。

「なに、今回入門する白浜刃君を紹介しようと思つての」

「今回梁山泊に入門する白浜刃です」

「はい、私は風林時美羽です。よろしく願いしまし」

最後の語尾が気になった刃だったがここはあえて何も言わなかった。

「それで刃さんは何を習いたいんですか？」

「できれば剣がいいんですけど」

ここで刃が剣を選んだのには理由があったのだ。その理由は・・・
「しぐれさんとおちかずきになりたい！」という少しくだらないものであった。まあこんな理由になったのは原作の中でしぐれが一番好きだったからである。あと中学から剣道をしているからである。
(ちなみに中2の時には全国大会で準優勝し中3の時には優勝した)
しかしこれは先の理由に比べれば刃にとってみればとても小さいものである。

「ボク・・・？」

少しうれしそうに言うしぐれさん。

「おいおい秋雨のほうがいいんじゃないか？」

「しっけい・・・な」

「おいおい私かね？」

「なる程。秋雨君なら教えるのにも慣れてるし、それに他の者だと・・・殺してしまうかもしれないからの・・・」

そう言いながら顔をそらす長老。

「あの、それならみなさんに教えていただきたいんですけど・・・」

いずれは梁山泊全員に教えていただきたいと思つてのことである。

「俺は弟子はとらねえ主義だ!!」

一番速く反応したのは逆鬼だった。

「しかしのう、さすがにそうなると死んでしまふ可能性が・・・」

少し悩む長老。そして何か相談し始めた。

） 梁山泊の豪傑 side ）

「おいおいさすがに全員は無茶だろう・・・」

難しい顔をする秋雨。

「秋雨どん拳法で戦いに入り、敵をつかんだら柔術！！さらに武器も使える。そんな達人作ってみないかね？」

秋雨にこっそり言う剣星。

「ほほう・・・興味が無いと言えばウソになるな・・・しかしそれでは弟子の体がもつかな？」

「失敗をおそれちゃ進歩はないね」

「さらにムエタイも加えれば最強よ！」

話に加わってくるアパチャイ。

「そうか、君は弟子を持ったことはなかったっけ。」

確認する秋雨。

「そうよ何事も経験よ！」

嬉しそうに言うアパチャイ。

「しぐれどもやるかね？」

しぐれに剣星が聞いてみる。

「う．．．ん」

どこか嬉しそうなしぐれ。

「で、どうするかね？逆鬼どん。なあに潰れたらそこまでの弟子だったということ、あきらめがつくね！」

逆鬼にせまる剣星。

「わ、わかったよ。弟子はとらねえ主義だが今回は特別だぞ．．．」

しぐしづ弟子にする事を認める逆鬼。

「素直じゃないね」逆鬼どんは

「うるせ！」

殴ろうとする逆鬼の拳をよける剣星。

「ではやってみるか」

そんな様子を見せし話を進める秋雨。

「あば！」

「昔から」弟子は生かさず殺さず」といっしね・・・」

戻ってきた剣星も言う。

） 梁山泊の豪傑 e n d （

「話は終わりましたか？」

ずっと待っていた刃が嫌な汗をかきながら言う。なぜならまさか本当に全員がこんな早く師匠になるとは思わなかったからである。

「これからは俺の事は師匠と呼べ」

そう言う逆鬼。

「はい！逆鬼師匠」

このあと逆鬼が照れたのは言うまでもない。

「おいちゃんの事は師父と呼ぶね」

「わかりました馬師父」

「私の事は好きなように呼びなさい」

「はい！岬越時師匠」

「アパチャイはアパチャイよ！」

「はい！アパチャイさん」

「ボクは・・・しぐれでい・・・い」

「はい！！！！しぐれさん」

「ん・・・ん」

しぐれが照れた。

「では早速始めるか・・・」

このあと刃が見るも無残な姿になった事は言うまでもない。

BATTLE 1 梁山泊！！（後書き）

新島式主人公設定＋ ＊梁山泊に弟子入り前

名前 白浜しはま 刃やいば

荒涼高校1年生

成績 上の中

運動神経 上の上

ルックス 上（カッコイイ系）

体格 上の下

ケンカ指数 上

根性 上の中

部活 剣道部 ＊中学の頃、全国大会に出場
中2準優勝 中3優勝

総合評価 A＋

ランク ライオン級

BATTLE2 白浜 元次の苦悩!! (前書き)

どうも曉です。

チート転生!!と同時連載だけどできるだけ速く更新していきたい
と思います。

BATTLE 2 白浜 元次の苦悩！！

BATTLE 2

白浜しらはま 元次もとつぐの苦悩！！

とある日、刃は一つの失敗をしてしまった。それは梁山泊の修行が終わり家に帰ってきたまでは良かったが玄関で力尽きてしまい気絶してしまった事だ。いつもなら、どんなに疲れていてもどんなに体が痛くてもどうにか自分の部屋までは行くのである。それがどうした？と思う人がいるかむしれないが白浜家では大問題なのである。気絶していた所をさ母おりや兼弟一やほ妹のかに見つかったのならまだ問題程度だったが元次父に見つかってしまったから大問題なのである。ちなみに刃はその大問題にちょうど直面していた。

「刃、自分のおこづかいでこの道場で剣道を習うのかはお前の自由かもしれない！しかし、こうも毎日傷だらけで帰ってくると・・・その剣道の道場、まともなところなのかいささか疑問だな・・・」

テーブルの周りには神妙な顔つきで言う元次と黙ってお茶を出すさおりと心配そうに見つめる兼一とほのかがいた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・まともではない・・・」

慎重に言葉を選びながら言う刃。

「!?!」

その言葉に驚く元次。まさかまともではないという言葉が返ってくるとは思っていなかったのだろう。

「…………でも…………まともでは無理なんだ!?!」

そついいながら席を立ち、立ち去る刃。今言った言葉は刃の本当の気持ちである。なぜなら、もし、今までどおり普通の道場に通い普通に剣道を習っていては少なくとも一年ちよつとには死ぬ可能性があるからである。最初の数ヶ月は戦うとしても相手は強くても不良レベルでの最強だかその後は達人級の師匠マスタークラスを持っている弟子が出てくる。そうなたら下手したら一撃で死ぬ事になるからである。そう考えるとどうしても梁山泊で修行する必要があるからである。

「ああ、待つて兄さん…………」

気が弱い兼一はどうしても強くいえない。

「待つてよお兄ちゃん!?!」

ほのかは立ち去る刃のあとを追った。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

しかし元次はその様子をただ黙って見つめていた。ここで元次はさ
おりに話しかけた。

「かあさん」

「はい、あなた」

今の短い会話だけでわかったのか、返事をするさおり。

「どどどどうしよう!! ねえ?? どうしよう!!? 息子が大ピンチ
!! 息子を・・・息子を守らなきゃ!!」

さつきまでの様子とはいっぺん、一気に取り乱す元次。今の変わり
っぷりをみたら誰もが驚くだろう。これでわかってただろう。元次
はかなりの親馬鹿なのである。

「あの子が自分で選んだ道場です。あの子を信じましょう」

そんな元次の様子にいたって冷静に対処するさおり。こつもさおりが冷静に対処できるのも、これはよくある事だからである。

「ぐわーっ！！またそんな事言つて、悪徳道場だったらどうする！？大事な息子に命がーっ！！」

いたって冷静に対処するさおりおよそに一人叫びながらじたばたする元次。

「そつだよ！いつそひと思いに道場の奴らを・・・って言つのはどう？」

そつ猟銃のセバスチャンに話しかけながら何かに取り付かれたように弾をこめる元次。なぜ猟銃があるのか、と思う人がいるかもしれないが元次はクレイン射撃をよくやるのである。しかも、かなりの腕前だ。

「あなた！！」

そんな元次にも動じず一声で止めるさおり。

「あの子が中学生になって初めて自分からしたいって言った剣道を

一生懸命頑張っているんです。だから今は信じてあげましょう。私とあなたの子じゃありませんか？」

そうさおりに言われ元次は「セバスチャンハウス！」と叫びながらセバスチャンをセバスチャンハウスと書かれた箱にしまう。

「そうだなさおり！！あいつにはわしらの血が流れてるんだもんなー！！」

そう言いながら手を組み合う元次とさおりだったがこの時さおりが「あなたの血の分が少し心配・・・」と思った事は元次が知るはずもない・・・

BATTLE 2 白浜 元次の苦悩！！（後書き）

新島のガ克蘭データ＋ ＊梁山泊に弟子入り前

名前 白浜^{しはま} 兼一^{けんいち}

あだ名 フヌケン （フヌケの兼一でフヌケン）

荒涼高校1年生

成績 中の下

運動神経 中の下

ルックス 中

体格 中の下

ケンカ指数 下

根性 下の下

部活 空手部

総合評価 E -

ランク 虫ケラ級

BATTLE 3

練習試合!! (前書き)

どうも暁です。

最近パソコンの調子が悪く更新が少し遅れてしまいました。これからはもう少し早く更新できるようにしたいと思います。が夏休みも終わってしまったのでやはり更新が遅くなるかもしれませんがこれからも頑張っ更新していききたいと思っています。

BATTLE3

練習試合！！

BATTLE3

練習試合！！

「静かに！」

主将の声で全員が止まる。ちなみに今はちょうど剣道部の稽古が終わったところだ。荒涼高校の剣道部では実力主義らしく入部したばかりの一年生は稽古はほとんどさせてもらえず掃除ばかりさせられている。これは中学で全国優勝していた刃も例外ではない。

「これから一年生との練習試合を始める。一年生達は今持つてる力を出しきるように！」

しかし今回は一年生の实力を見るための練習試合があった。これは先輩達が入部したばかりの一年生が調子こかないように痛めつけるのが本音だが、そんな事は知らない一年生は「俺の实力を見してやる！」とか「〇〇先輩とやりたい！」とかいってはしゃいでいる。

「では一年生は準備ができた者から年、組、名前を言って相手を選んでくれ！」

今回の練習試合では一年生が先輩達の中から相手を自由に選べるらしく、たとえ主将だろうが指名すれば相手してもらえらしい。だからなのか一年生の半分近くは相手に主将を選んでいる。まあ「この練習試合で主将に実力を見せて自分も練習に加わるぞ!」とか言うのが多くの本音だが・・・

「はい!一年〇組の〇〇です!〇〇先輩お願いします!!」

早速一人目が出たが結果は言わなくてもわかるが一回もあたらず負けてしまった。しかし一人目が出たと言う事で一人また一人と挑戦していく。しかし、ここでまだ動いてない人の考えは二つに分かれるだろう。一つ目は「人数が多いので最後の方でいいや・・・」と言う考えの人だ。二つ目は「最後の方なら先輩もさすがに疲れてて自分でも当てる事ができるだろう・・・」という新島みたいな考えを持っている人だろう。ちなみに刃は一つ目の考えだ。

「次は誰だ!」

しかし先輩の多くはそんな考えは見通しており、軽くあしらう程度しか力を出していない。まあ数人、いわゆるアパチャイみたいな手加減が苦手なタイプの人は後先考えず全力で相手しているが・・・

「残りはお前達だけだぞ!どっちが先だ?」

始まって三十分せず残りは二人だけとなった。しかしこれまでに何十人も相手しているはずの主将はあまり疲れている様子は見せていない。この様子を見て主将目当てで残っていたもう一人は焦っていた。

「じゃあ俺が行きます！」

しかし刃は「人数が多いので最後の方でいいや・・・」と考えていたので先にやることにした。しかしこれによってもう一人のほうはさらに焦っていた。まあ簡単に言えばさすがに最後はいろんな意味で目立つから嫌だからだろう。

「お、俺が先にやります！！！！一年一組、土方ひしかた 敏明としあきです！主将お願いします！！！」

本来かなりの実力があり、いつもの調子でいけたなら一回ぐらいはあたたかかもしれないが焦っていた事もあり、かすりもせず負けてしまった。まあこの人物が一年後に副将になった事で”鬼の副将”と呼ばれるようになった事やあだ名がもちろん”とし”になったのは銀魂に影響されたからという事はまた別の話である。

「お前で最後だ！」

「一年一組、白浜しらなま 刃やいばです！主将お願いします！」

もちろん刃が相手に選んだのは主将である。なぜなら梁山泊でまだ短い間だが鍛えられた自分の実力はどれくらいなのか少なからずとも気になっていたからである。まああと数ヶ月もたてば梁山泊で鍛えられている刃にかなう一般人はいなくなるが今ならまだ刃と少なくとも互角には相手できるだろう。

「では・・・はじめ！」

はじめ！と言われてもまだ二人とも距離はつめずある程度の間隔をあけて動いている。どちらも相手の出方をうかがっているからである。そんな様子に先に痺れを切らした主将が攻めてきた。

「やあ！！！」

しかし日ごろ梁山泊で師匠たちの動きを見ている刃にとってはかなり遅く見えたがここは無難に竹刀の側面を使って竹刀を受け流し、また距離をとった。しかしその様子を見て主将は「刃は攻める気はない」と考え一気に攻めてきた。

ガシ！ガシ！！ヒュッ

面、胴、小手と順番に狙っていくもどれも受け流され、もしくはあ

たらなかった。しかしこれによって少なからずとも主将はあせり始めた。なぜなら一年生に負けてしまったら荒涼高校の主将としてのメンツが丸つぶれだからである。しかしここで焦ったのが致命傷になった。

「面！！！」

刃は主将が焦った隙に面を狙ったが途中でわざと外し大きな隙をわざと作った。まあ「さすがに主将が一年生に負けるのはやばいんじゃないのか・・・」と思ったからわざとはずしたのである。まあその後は狙い通り主将は面を狙った一撃を防ぎ刃がわざと作った隙についてこの試合は終わった。そして今日の稽古は刃と主将との練習試合で終わった。

） 部活終了後 （

今はもう部活も終わり、もう他の生徒はほとんど帰っていて今残っている生徒は数人しかいなかった。そのときいきなり主将に話しかけられた。

「ちょっと聞きたい事があるんだがいいか？」

「はっはい・・・なんですか主将？」

この時刃は驚いてた。まあ、まだ入部して間もない一年生がいきなり主将に話しかけられれば誰でも驚くと思う。しかもその上聞きたい事があると言えばなおさらだが……

「さっきの試合でだか……なぜ最後わざとはずしたんだ？」

「!?・・・何の事ですか？」

刃はさらに驚く事になった。なぜならまさか最後の―撃をわざと外した事に気づいた人はいなかったと思つていたからだ。その証拠に副主将などは「主将、最後の―撃危なかったよな!」と言つた生徒に対して「主将はわざと危ない不利をしたんだ!」と言つていた。．．．いや怒鳴つていた。

「シラをきる気かい？ 最後の一撃はあのままいけば決まっていた。それをお前はわざと外した．．．違うかい？」

•

万事休すかと思ったが、ある人物によって助けられる事になった。

「刃！一緒に帰ろうぜ！……主将！？失礼しました！！！」

その人物とは「とし」つまり敏明だった。としは刃は主将と話していたと気づくと急いで逃げるようにその場から立ち去ろうとしたが、刃もこの状況から逃れるチャンス逃がさないために藁をもつかむ思いでとしを引き止めた。

「とし！待て！！」

その一声にとしは一度止まって振り返ったが、なぜか「お前の犠牲は忘れない！」と言って走り去った。

「しゅ、主将・・・もう行っていいですか？」

頼みのとしも主将と言う強敵を前に敵前逃亡をしてしまったので何とかこれをネタに逃げようとしたが「今回はこれぐらいで勘弁しといてやる」と言って素直に開放してくれた。こうも素直に帰らせてくれたということに少し驚き少し固まってしまったが次の「また今度。今度はじつくりと邪魔が入らない所で二人きりで話し合おうじゃないか・・・」という主将の言葉を聞いた瞬間、固まっていた体を動かし急いで裏切り者の後を追った。

BATTLE3 練習試合！！（後書き）

新島のガ克蘭データ+ ＊練習試合時点

名前 ひじかた 土方 としあき 敏明

荒涼高校一年生

成績 上 下

運動神経 上 中

ルックス 上（結構銀魂の土方に似ている）

体格 中 中

ケンカ指数 中

根性 中 下（試合時のみ上）

部活 剣道部

総合評価 B+

ランク 虎級

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1515n/>

史上最強の兄

2010年12月9日13時39分発行